

時事新報

第千六百六號 日本曜日
 乙酉十一月廿六日(庚申)
 午前七時十分
 午後二時十分
 午後四時十分
 西曆一千八百八十五年

時事新報定價

一、本報定價
 一月五圓、三月十五圓、半年三十圓、一年六十圓、外埠加郵費
 二、廣告費
 第一版每行一圓、第二版每行八角、第三版每行六角、第四版每行四角、每日以上者減半、一月以上者九折、三月以上者八折、半年以上者七折、一年以上者六折、長期廣告另議
 三、代印費
 每行一圓、每日以上者減半、一月以上者九折、三月以上者八折、半年以上者七折、一年以上者六折、長期廣告另議
 四、發行費
 每份五分、每月一元五角、三月四元五角、半年八元五角、一年十六元五角、外埠加郵費
 五、零售費
 每份五分、每月一元五角、三月四元五角、半年八元五角、一年十六元五角、外埠加郵費
 六、印刷費
 每份五分、每月一元五角、三月四元五角、半年八元五角、一年十六元五角、外埠加郵費
 七、其他
 本報代印各種帳簿、名片、請柬、契約書、章程、合同、各種書冊、均極精美、價廉物美、歡迎各界垂詢

時事新報

年既に窮し民亦窮す

年既に窮し民亦窮す。年華勿々本年も早や今日限と爲り日本國中も都も年越しの用意は忙しきものとあらん其忙はまさるとは何ぞや自出度く新年を迎るが爲に疊の表替、障子の張替、子女の新年装束、年の市に買物、歳暮の贈答、餅つき、注連り、其多事なる中に就ても最も大切なるは金銀取引の勘定にして買物の代金、借入金、返済金、貸金の催促取立、抵當入替、禮文書替、千差萬別恰も舊一年中の人事をこの數日間を終りて新年の事の端を改るもこれにして其間運動する之何ものぞと尋るに人の手足と世の金錢と此二つの者にして所謂金の忙はしき時節なり然るに日本の金は此の忙はまさき時節に於ては其の運動と違つて得ず金穴は庫の内には通貨堆きを成して始末又因り公債證書も既に買盡して七分利付百圓以上にて何分面白からず左りとて品物の仕入には其不測に備りしして更手出しし勇氣なく人お貸さんとし借人れ多死こと山の如く雲の如しと雖も其危きを如何せん先づ以て有品の賣れるだけと賣り貸金の取れるだけと取立て庫中の金箱と覗きて磁々年を越さんのみ願ひて田舎の離離社會を見れば大貧小貧その行詰の苦まきは石に手を扱されざるが如く其やりのりの恐ろまきは火の車の廻りがるが如し地券面の價に二倍する地面と買入れ又抵當取取りて今の實價は券面の三分一より半お過ぎせ之を抵當にせんとするも十萬圓の地券に對して千圓金と貸す者おし蓋し地價下落すと雖も券面百分一に下りたるも非ずと雖も千圓てふ大金は田舎地方に止まると得ずして都下の一部分に懸積したればあり音も千圓を以てのまなす百圓もあし十圓もなま一村と擧げて一圓札を見ず買物に十圓札と辨ひ其つり錢の兩替に全村と奔走したりとい實事談に聞く所なり資金は仕事に媒介ふまて荷も資金あければ獲利満地と稱する田舎にても一事業の起すべきものなく數百年は舊富豪と稱する者も軒と並べて身代限を受け其狀恰も舊藩士族が廢藩の時に苦しめられざるの苦痛に異ならず況して其以下の小貴者に於てや三五年以來取て仕事と忘るゝお非ず心の怠るゝ非ず身は不叶なるに非ずと雖も唯如何せん執る可きの仕事お

くま手と空うせざるを得ず日お手足の働くと以て日に口腹を養ふ者が働く可きの仕事に依りつかず飢るなうらんと欲するも得べうらざるあり朝お食を得るも夕に食ふ可きの目途おし身代限の如きは殆ど尋常一様の人事として怪しむ者もあらざれば亦自か不外聞と思ふ者もなし日本の人民頼に徳義を失ふたるも非ずと雖ども金と借用して返済の道お手足と勞して錢の取るべきもればあざれば不義理と知りあがらざる之を犯さざるを得ず甲は乙に不義理乙丙に違約し違約不義理傳へ又傳へて將倒しとは正お今日の實況に於て商賣上の徳義地と辨ひ土崩瓦解既にその極點に達したるものといふべし東京などの人が都會繁榮の地に居て地方の慘狀と目撃せざればお氣樂にしく今日も尚は天下の政と談じ經濟を語る等その心甚だ優暢なれども試み我輩が田舎の人お代りて思ふ所を吐けば百姓腹空うて政談を聴くの耳なし傳へ聞く東京にこそ大役人の進退ありて政事が云々なるべしお云ふ者おれども役人の進退以て直に今朝の飢と醫するものにあらざれば喜憂するに足らず誰れが立身して得意あるも誰れが失敗して不平なるも悠々たる路傍談のみ或は來年一月一日より紙幣交換は事始まるよと、可なり富める人貯蓄の紙幣を銀にして改めて穴藏に埋むべし吾々の手には一片紙幣交換とべきものなま銀より紙幣たり唯富者の心事を煩悶せざるに足る可死のみ吾々貧人の心と水の如く家は洗ふが如く坐して負債の責と受け身代限と待つの外おし云々と云ふことならん左れば目下全國に貧人は其大小に論なく必死の極點に達したるものにて其事實は公債證書の騰貴、各銀行の危険、地面家屋等不動産の價の下落、人力車夫の増加、安泊りやせやの繁昌、海外へ下等人民賣淫婦の渡航等逐一計るに違わらざる或は民権論の衰微、新聞紙賣捌は減少も其一徴とて見る可きものあらん

年既に窮し民亦窮す。此の窮厄と拂ふの工風と思ふ者何事か能くこれ厄と拂ふの目的を達すべきものぞ一回全局の大事の政府の力にあらざれば叶はず國民の窮を救ふの大策は工業と起その外おしあるべからず目下の大工業は鐵道敷設を除て他に求むべからず來年早々政府も必ず之に着手するならんお我輩の信する所又憂望する所なり語を寄す天下無敵の窮鬼、窮は百年の窮にあらず來年の今年に變はりて目出度き事もあるべきなり

官報

明治十八年十二月二十八日
 任四等侍醫 東京大學教授正七位 原田 豊
 任五等侍醫 四等侍醫正六位勳六等 高階 經徳
 任五等侍醫 東京大學助教勳六等 田澤 敬興
 任千葉縣警部長 千葉縣警部 小林 南八
 〇昨二十八日文武各省お於ては從前各局を廢し更又文部大臣、官房學務局、編輯局、會計局を置き其事務章程を定めたり (事務章程略す)
 又同省中に視學部と置きたり其の章程は左の如し

本省中視學部ヲ置キ府縣ヲ五部ニ分テ各一部ヲ擔任
 其學事ヲ察シテ文部大臣ニ具申スルコトヲ掌ラシ
 視學官ニ屬官若干人ヲ附シ事務ニ服セシム
 又體操傳習所ヲ東京師範學校の附屬とし音樂取調所ヲ
 音樂取調掛と改め文部大臣官房の附屬と爲之たり
 〇芳川内務大輔外十名は昨二十八日左の通り仰渡され
 日本藥局方編纂總裁被免 内務大輔 芳川 顯正
 一等侍醫軍醫監 池田 謙齋
 内務省三等出仕 長與 專齋
 陸軍軍醫總監 松本 順
 海軍軍醫總監 戸塚 文海
 海軍軍醫總監 高木 兼寛
 軍醫本部次長兼内務 石黒 忠恵
 軍醫監 緒方 惟準
 軍醫監 三宅 東海
 東京大學教授一等軍醫正 永松 三宅 秀
 東京大學教授 柴田 承桂
 日本藥局方編纂委員被免 (以上三件本年十二月廿九日官報被免)

支那東京境界委員 支那東京境界委員より廣東の西六百英里なる太平洋の報知に據れば同委員等も廣東より舟に西河を溯り五週間を経て太平洋に着せしが其間お起りたる變事唯セームスハート氏の乗りたる小舟がリンリの急流に破れたるものととなりて而して同委員等は本月初頃には支那の境界より三十英里計り手前なる龍州に達すべき日取なるが同委員等は水路に由り夫より陸行をせし都合ある由又同委員の報知に據れば劉永福は當時ナンニン府に在りて現は精兵五千人と有し尙其上に兵士を募集中なりと云ふ (上海クローニル)

〇生糸貿易沿革の概略(前號の續き) 慶應元年も格別の變りあきて保合以翌二年も地方にて浪士の勢ひおすく盛んとして生糸荷出先方に困難と極め其間、外商と内商との間に色々の事おり相場は七百弗より八百弗の間と往來し洋銀は四十二匁五分位にて保合は居たり、同三年も別は變化なく同四年四月に至り明治と改稱し新政府は基礎定まりたるより生糸商人は内外共一般に安心の思を爲し隨つて取引も多くなり翌二年は日本各地霜害の爲め提系前橋二番半七百弗と始まり千弗迄騰貴したり今年と二年との輸出高と比較すれば左の如し

明治元年	明治二年
英國へ 八千十個	八千三百七十二個
佛國へ 六千五百五十六個	五千八百四十四個
米國へ 七百九十九個	三百五十三個
伊太利及 十九個	九十八個
其他へ 一萬四千九百八十四個	一萬四千五百三十四個

翌三年には取て變化なく七百弗より八百廿五弗に保合は居りしが四年には彼の普佛戰爭の影響にて歐洲との取引殆んど絶えたるより生糸の相場は三百九十五弗おまで低落せしが和成るよ及んで六百八十弗迄引戻し同五年には新系の相場は下足とあり六百五十弗より五百八十弗まで下落せしが更に六百五十弗へ引戻し六年は五百二十弗お始まりて六百弗を高直とし七年は新系四百三十弗に始まり四百八十の高直ありしも追々下向の模様なり此時商館の番頭へ荷造りカン料とて生糸一個お付二弗半をまかせ事を應じたりしが其事は就き内外商人の間お種々の紛議あり同八年は新系四百二十弗に始まり三百七十五弗の安直あり(聞港以來此時にまで始めての安直なり)て和置貿易商